

「伝統文化の創造的表現を用いて創造するソーシャルワーク関係の変化」

このワークショップは、創造的な芸術文化表現を用いてソーシャルワーク関係に変化を及ぼす方法を学ぶことを意図して計画された。筆者は、これまで数回インドのソーシャルワーク会議に参加している。会議を通じて最も印象に残ったのが、創造的表現方法を用いた社会問題の伝達に関するプログラムである。複数のこうした機会を経験し、言語以外の創造的表現方法は、ソーシャルワークにおける関係を変化させるうえで有効な手段となりうると実感するに至った。関係の変化とは、クライアントとワーカー両方に生じるエンパワメント、解放、立場を超えた連帯意識、変化への希望、などである。

今回のワークショップは、9月17日、クライスト大学の教室で、70名あまりの参加者を迎えて開催された。参加者の文化・言語の背景は、アジア太平洋地域の20か国以上の国々の人々である。冒頭、ムンバイ大学のS・ジャスウォール教授が主題について解説、その後、参加型の演習に移った。実技指導は、マイソールの表現科学研究所の表現ディレクター、スリナバスNA教授、助手はラダー講師が務めた。

言語を超えた表現方法による場と意識の共有の可能性を実技指導を通じて行うことが目的である。スリナバス教授の発語と身体表現とともに、ラダー講師の歌唱とも演劇の発語ともとれる重厚な声が会場に響き渡り、聴衆の精神と身体が揺さぶられる。地元の言語で発せられる表現、身体的な動きに対して、聴衆はまずそれらを真似、発語する。会場で生まれるうねりは、参加者が自発的に身体を動かし場の空気を共有することになる。

会場に響く重厚な歌唱と身体表現を心地よいものと感じ、みずからもその波のうねりに身と精神を投じてゆく。会場に生じる変化の波を予期しながら、そこで語られるメッセージを共有することで何が生まれるのか、問いと期待を求めて参加者は演習に参加した。

ワークショップでは、舞台装置や衣装などを用いず、人間が持っている声や身体表現というシンプルな創造的表現手段を採用していた。これ以外にも、パントマイム、子どもや家族が参加する演劇と音楽、ストリートプレイ、化粧や衣装、大掛かりな舞台装置の活用など、多様な表現方法がソーシャルワーク関係の変化を意図してソーシャルワーク教育の現場で試行されている。こうした表現方法を伝達する側には、創造的な表現への親しみ、効果への信頼とともに、身体の表現訓練により、言語表現だけでなく、自らが可能な手段をソーシャルワーク関係を動かす原動力として取り入れることの意義を実感することが重要だと思われる。今後さらに幅広い方法の活用と経験の場を模索してゆきたい。参加者の多くから肯定的な印象を得ることができた。

(木村真理子)